



SUITA ESAKA ROTARY CLUB

CLUB WEEKLY BULLETIN

創立年月日 / 1990.2.27
事務所 / 〒564-0063 吹田市江坂町1丁目23番101号(大同生命江坂ビル12F)
TEL06(6821)0222 FAX06(6821)0206 E-mail:saka-rc@lake.ocn.ne.jp

例会場 / 新大阪江坂 東急イン・3F 〒564-0051 吹田市豊津町9番6号 TEL06(6338)0109 例会日 / 毎週火曜日 12:30~13:30
会長: 渡辺 忠雄 幹事: 西本 健二 会報委員長: 速見 憲

2010年2月20日 第941回例会(第940号)

本日の例会

今週の歌 「奉仕の理想」

創立20周年記念式典

次回例会のお知らせ(3月2日)

卓話 「私の職業」

~会員交流のためのスピーチ~

西山、小笠原、大森、大井、庄瀬、杉本 各会員

前回〔2月16日〕例会記録

来客
林 白 政 さん(米山奨学生)

会長の時間 渡辺 会長

皆様、こんにちは。

当クラブ創立20周年記念式典および祝宴が、いよいよ目前に迫って参りました。

先週の例会後に記念式典に向けての20周年実行委員会があり最終の打合せも終了し、後は20日の本番を迎えるわけですが、西本幹事に確認しましたら、今日現在の出席予定者は124名となっています。20日の天気、週間予報では晴マークが付いていました。

各委員会委員長並びに会員の皆様、ご協力宜しくお願い致します。

また、来週の23日の出前授業の講師をして頂きます芳賀会員、西本幹事、金馬奉仕活動委員長、職業奉仕担当の内田会員には記念式典に引き続きお世話をお掛けしますがよろしく宜しくお願い致します。

出席報告 木元 委員

【2月16日】
在籍会員 44名(内出席規定適用免除者 9名)
出席会員 38名(内出席規定適用免除者 8名)
ホームクラブ出席率 88.37%

1月26日のMUを含む出席率 92.68%

昨日、小谷会員より電話を頂きました。もう少ししましたら例会に出席出来るとの事で、皆さんによりしくお伝え下さいとの事でした。出席されましたら、温かくお迎えの程お願い致します。

ニコニコ箱

栢本 会員 九州宮崎の巨人軍のキャンプを観に行ってきた。

小笠原 会員 家内の誕生日祝、有難うございました。前回欠席してすみません。

大森 会員 先週欠席してすみません。

本日分 11,000円 累計 910,000円

卓話

「シャンソンと私の20年」(2月9日・第939回)

延 秀 恵 会員

私がシャンソンを勉強しだして22年が経つ。どうしてシャンソンだったかと言うと、4歳からクラシックピアノを習い、5~6歳位から、母が好きだったシャンソンのレコードを意味もわからず家でよく聴いていた。それが何十年経て、ピアノもシャンソンも忘れかけていた頃、シャンソンという文字を目にした時、子供の頃のシーンがよみがえり、ふっと歌いたいと思った。いろんな曲想、リズム系体があるのが私としてはおもしろく、勉強しがいがある。

習い始めた時は、趣味として楽しく歌いたい!という気持だった。まさかそれが、人生の2/3を過ぎた時、本業になるうとは...思ってもいなかった。

昨年7月、いつか必ず出てみたいと思っていた、

ロータリーとは、他人に対する思いやりと、他人のためにつくすことである。

サンケイ新聞社主催のバリ祭（大御所から新人まで、シャンソン歌手によるシャンソンのステージ）に、やっと夢かない出演した。本当に感無量だった。とにかくまず、このバリ祭に出ることを目標に勉強し続けた。ふり返るとこの20年は、私としてはどちらかという、声を作ることにその多くの時間を費やしてきた。何故なら、シャンソンの前は23歳より18年程、春日流の小唄と三味線を習い、名取り“春日とよ勇秀”を名乗っていた。こちらの方は完全に趣味であったが、私の声にあっていたのか、習い出して3年程で名取りとなり、最も若い名取りであったが、それ以来ずっとこのどで歌い続けたまま、師匠がお亡くなりになる迄、一番弟子を務めた。そのあとシャンソンに転向したのだが、私にとっては“同じ歌うことじゃない！”という位の軽い気持ちだった。5年前、正式に歌の道に生きようと決め、プロのヴォイストレーニングを受けた時、先生が“まあよく小唄からシャンソンなんて思ったものね!?”と言われたが、その意味が今だからこそ解かるようになった。では小唄時代はどのような声だったのか？ 今から33年前、27歳時の春日とよ勇秀、小唄“編笠”をお聴き下さい。そして今シャンソンを歌う声はどうなのか？ 曲想の違う曲でお聴き下さい。（酔いしれて、私の孤独、名残りを惜しんで）

最後に、いつも応援して下さる方々への感謝の気持ちを忘れず、初心を忘れず、これからも一歩ずつ更に勉強を重ね、今以上にいろんな声が使えぬ歌手をめざし、先にある私にとってのオリンピックのメダルをとれるようがんばりたいと思っています。こうなると年齢なんて関係ありませんね！

卓 話

「旅行と飛行機」(2月16日・第940回)

米山奨学生 林 白 攻 さん

皆様、こんにちは。私はこの2年間、吹田江坂ロータリークラブのお世話になってきて、学校もプライベートも充実して過ごしてきました。この場を借りて、まずは皆さんへの感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございます。土曜日は吹田江坂ロータリークラブの創立20周年記念式典といったおめでたい行事を迎え、一緒に参加できて、とてもうれしく、光栄だと思います。そして、クラブと親交を重ねた台北の友好クラブの方々も台湾からいらっしゃるということで、今日は台湾の話をしてみようと考えました。

クラブの皆様は台湾へ行ったことのある人は多いと思っております。台湾と日本の関係の深さを皆さんもご存知だと思います。台湾は日本からの影響は多く、今でも日本時代の面影は所々で見かけます。

特に、旅行に関するスポットの開発や交通の整備など、日本に統治された50年間、たくさんの「遺産」が残されました。タイトルは旅行と飛行機ですが、余り資料が多すぎて、話しかれませんが、旅行の交通手段の中の船と飛行機のことを中心に、皆さんに紹介しようと思います。

手元にある昭和15年(1940年)の『台湾鉄道旅行案内』によると、当時、台湾での島内旅行の環境はある程度整い、空路に関して、毎日台湾と日本の間定期便が飛んでいたことが分かりました。昭和11年1月から大日本航空株式会社の手によって、福岡台北間の航空路が繋がれたのを始めとし、続いて台湾島内西線、島内東線が開かれ、13年4月からは日発循環航にまで発展しました。日本台湾間の内台線にはダグラスDC2型14人乗り及び三菱双発機など当時最優秀機といわれるものが就航、福岡台湾間1,610キロメートルをわずか6時間余りで連絡し、船で4日間かかる東京台北の間でも、1日に短縮されていたということになります。

しかし、その時、人々が海外へ行く時、主な交通手段はやはり汽船でした。

台湾と日本の間では、殖民地になって翌年の1896年から、神戸、門司、基隆間連絡定期航路が開かれました。それ以来次第に発達して、日本との間だけではなく、台湾島内、そして、台湾から中国へ、南洋への航路も定期的に運航していました。当時、台湾と日本の間を往復していたのは大阪商船と日本郵船の2社でした。

大阪商船は、競争相手の日本郵船に対して、大型船の投入などで常に先手を打ってサービスの向上に努めました。そこで、台湾航路用の新造船として建造されたのが高千穂丸でした。「浮かべる宮殿」とも言われ、台湾と日本間を往復する人たちに親しまれた高千穂丸は戦争のせいで、潜水艦により撃沈された悲惨な終焉を迎えざるを得なかったです。

1943年、高千穂丸遭難により、日本と台湾および上海を往来する船舶は、護衛艦がつけられ船団を編成して往来することとなり、もはや平和的な船旅は過去のものとなりました。そして、1945年4月に沖縄戦が始まると、台湾航路は事実上姿を消しました。

一つの時代が終わりましたが、日本人が台湾で発展させたもの、残されたものは確実に統計できませんが、とても多く残されました。今の台湾では、日本時代を偲ばれる人々もたくさんいます。これからも日本と台湾の友好関係を祈りながら、今日の卓話を終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。